

日本語のテキストに見られる様々な「前置き」の 認定について

小 沼 喜 好

1. はじめに

日本語のテキスト（文章、談話等）には、様々な「前置き」が見られるが、本稿ではその様々な「前置き」はどのような手がかり、根拠に基づき「前置き」だと認定できるかを、様々な例を分析することで考察する。

「前置き」は、『例解新国語辞典』（1992：873頁）の語釈、「本題や本論に入る前に述べることば」を援用し、「本題、本論、結論、答等の前に述べることば」と定義する。「前置き」は「本題、本論、結論、答等の前に述べることば」という形式から見た名前に過ぎず、機能、働きにつけた名前ではない。

「前置き」は大きさから見ると、単文（節）で表現される小さな「前置き」から複数の文で表現される大きな「前置き」まである（小沼2007）。また、小さな「前置き」が大きな「前置き」に含まれるという階層性も見られる（小沼2011）。

機能、働き（以下働き）から見ると、話題、主題、題目（以下話題）を提出する「提題の前置き」、相手との接触の際の緊張を緩和するために直接本題に入るのを避ける「儀礼の前置き」、そして「情報付与の前置き」（小沼2021）等がある。

では、次の例を見よう。

(1) その次の大きな戦争はベトナム戦争ですが、この戦争でも武器によって解決された問題は一つもない。（『世界』2005.8：52頁 下線は小沼）

(2) 除去はフロリダ州裁判所が「尊厳死」を求める夫の訴えを受け入れて支持したもののだが、それは七年におよぶ法廷闘争の結果であった。

（『世界』2005.8：276頁 下線は小沼）

(1) では、「その次の大きな戦争はベトナム戦争ですが」と「が節（接続助詞『が』による節）」で述べることで、話題を「前置き」で提出し、それを次の主節で「この戦争」と受け、叙述を続けている。(2) では「除去はフロリダ州裁判所が『尊厳死』を求める夫の訴えを受け入れて支持したもののだが」で話題を「前置き」として提出し、主節で「それは」と受け、叙述を続けている。

(3) 遅くなってすみませんが、本をお送り下さりありがとうございます。

(4) すみませんが、駅へはどういったらいいでしょうか。

(3)、(4) 両者の下線部も「前置き」であり、この場合の「前置き」は、働きから見ると接触の場面で直接本題に入るのを避けるための「儀礼の前置き」であり、接触での緊張を和らげる緩衝材として働くものであり、定型の表現が多数存在している。

次の(5)下線部の前の箇所も「前置き」であるが、(1)-(4)とは異なり、文がいくつか繋

がった大きさの「前置き」である。

(5) [経済観測] 成形と異端＝道

レジティマシーという言葉は本にたとえるなら、草張りのズシリと持ち重りのする古本みたいな感じである。合法性、正統性、正系とか訳すらしいが、聞くからにものものしい。英語知らずの勝手な思い込みで、ネイティブにとっては手軽な文庫本なのかもしれませんね。(前置きが長いゾ? ハイハイ)

米政府の関係者と話すと、彼らはこんなことを言う。アジアの経済危機で皆さんもよく分かったと思うが、政権のレジティマシーが危機を克服できるかどうかの大きな要素であるようだ。韓国しかり、タイしかり。民主主義は偉大だね。

開発独裁ではこの厳しい市場化された世界を生き抜くのは難しい、と言いたいのかな。まあ、そうおっしゃりたければ、止めはしない。そんな気もしないではないから。

(以下略)

(『毎日新聞』1999.1.22 下線は小沼)

下線部の前の箇所すべてが「前置き」であるが、下線部で著者自身による「(前置きが長いゾ? ハイハイ)」と自問自答の表現が出現する。これにより、ここまでの箇所は著者自身が「前置き」だと捉えていることが分かる。

異なる「前置き」をいくつか示して「前置き」の認定を概観したが、本稿ではこのような「前置き」の認定を、様々な例を考察することで詳述する。

2. 先行研究

はじめに先行研究を概観する。

「前置き」は、働きに付けた名前ではなく、「本題、本論、結論、答等の前に述べることば」を指すにすぎないので、異なった立場からの接近法が存在する。

「前置き」に関する研究として、談話分析での「前置き」研究、各研究者が言うところのメタ言語表現研究の領域での「前置き」研究、モダリティからの研究、接続助詞「が」(「けれども」は「が」に含める)の研究、「前置き」そのものを対象にした研究がある。

談話分析では、ある種の談話を研究する際に「前置き」の存在の有無と、どのような働きをしているのかの考察が重要になる。

各研究者が言うところのメタ言語研究は、「前置き」を目的とした研究ではないが、各研究者が言うところのメタ言語表現の一部が「前置き」として用いられるので、結果として「前置き」の研究とみなせるのである。

また、あるモダリティ表現が従属節として主節の前に置かれた場合に、その表現は「前置き」として働くので、「前置き」の研究と見なせるのである。

接続助詞「が」の研究は、「が」で終わる節を用いて「前置き」を表すことができるので、「前置き」の研究に含まれるのである。

次に、2.1 談話分析での「前置き」研究、2.2 各研究者が言うところのメタ言語表現研究の領域での「前置き」研究、2.3 モダリティからの研究、2.4 接続助詞「が」の研究、2.5 「前置き」そのものを対象にした研究、の順で「前置き」の研究を考察する。

2.1 談話分析での「前置き」研究

柏崎（1993）は、話しかけ行動を談話のひとまとめと捉え、話しかけから依頼・要求などの用件内容表現まで録音収集した資料を分析対象にしている。「前置き」を、話し始めから用件内容を述べる前まで、つまり、用件内容に先立つ部分と定義している。

柏崎は筆者と異なり、「ちょっと」「あっ」まで「前置き」に含めている。また、談話の用件内容中の前に見られる部分を「前置き」としているの、筆者と異なり、用件内容の中には「前置き」が出現するとは考えていない。

三井（1997）は、依頼の電話会話を分析資料としている。依頼の際に生ずる被依頼者の心理的な負担の軽減と、摩擦の回避を図るための依頼先行発話として、

- A. 前置き：「ちょっとお願いがあるんですけど」等の、依頼をすることを明らかにする、メタ言語的な発話
- B. 情報要求：被依頼者が、依頼遂行できる状況にあるかどうかをあらかじめ尋ねる発話
- C. 事情説明：依頼の理由・必然性等を述べる発話

の三つが用いられていると述べているが、筆者の前置きの立場からするとA, B, Cともに「前置き」と捉えられる。

2.2 各研究者が言うところのメタ言語表現研究の領域での「前置き」研究

杉戸（1983）は、ハイムズ（Hymes 1972）を援用し、言語行動を「言語行動の主体」、「物理的場面」等の12の要素に分け、この要素に言及の焦点をあわせた言語行動であるメタ言語行動を注釈と呼んでいる。そして、この注釈は、同時に話し手と話し相手との関係に配慮をする言語行動なので待遇表現と考えている。これらの要素は、次に来る主節で示される言語行動を注釈するメタ言語行動であり、主節に対する「前置き」となっている。杉戸の分析対象は、すべて文（節）の大きさでの「前置き」であり、主節で示される言語行動に対する注釈としての「前置き」である。

西條（1999）は、談話の中における西條の言う「メタ言語」の役割を考察し、その働きを「①話題の提示」、「②焦点化」等大きく7つ、さらに5つの下位分類、合計12に分類している（21-22頁）。そして談話を結束性あるものにする事で談話の構造化に役立つと述べている（116頁）。

西條の分析対象の言語表現はすべてが発話の初めに来るというわけではなく、「…というような体験が、非常に大事なんじゃないかと思うのです。」（22頁）のように最後に発話を締めくくるときにも用いられるものもある。したがって、本稿の考察立場からすると、西條のメタ言語のある種のものが「前置き」となる。

2.3 モダリティからの研究

中右（1994）を説明する。モダリティは、「発話時点における話し手の心的態度」（42頁）と定義され、命題内容を限定する命題態度であるSモダリティと、伝達様式を限定する発話態度のDモダリティに分けられる（53頁）。このうち、後者に属する発話様態のモダリティは、「話し手自身の発話行為を限定し、発話内容や発話様式について前置き・但し書きなど、

なんらかの留保条件を言い添える働きをする」(60頁)。例として、「率直に言って」、「内緒の話だが」等が挙げられている。このモダリティは、主節の前に置かれるので、「前置き」となり、考察の一部が、「前置き」の考察と重なると言える。

2.4 接続助詞「が」の研究

小出(1984)を考察する。小出は、接続助詞「が」全体を分析対象にし、働きを1-4に分けている(31頁)。

1. 談話主題の提示
2. a. 補足説明の提示 b. 前置き
3. 発話行動への注釈
4. 二つの対比的事柄の提示

小出の分類であるが、1「談話主題の提示」は、「談話主題」の提示であるので、「提題の前置き」となる。2a「補足説明の提示」は、本稿の定義では「前置き」であり、小沼(2021)の「情報付与の前置き」と似ているが、「補足説明の提示」は、文(節)でなされるが、「情報付与の前置き」は、文がいくつか集まったテキストでなされているという点で異なっている。また情報を聞き手に与え、情報の共通の地盤を作るという働きはない。

2b「前置き」は、小出の分類では、「前置き」以外はすべて働きを示す名称によって分類がなされているが、「前置き」は、働きによる名称ではなく、また、「前置き」の定義はなされていない。

小出の3「発話行動の注釈」は、上述した杉戸(1983)の注釈と完全に重なる働きである。また、小出は、注釈がなされる理由の一つとして、相手への配慮を挙げているが、これも杉戸が注釈を待遇と捉えていることと重なるので、これも「前置き」になる。2, 3は一緒にし、「前置き」と捉えられる。

4は、小出も説明している通り、どの分類項目へ入れるべきか、それとも新しい分類項目を作るべきかという曖昧な例であり、「前置き」の考察から除外される。

次に亀田(1998)と高橋(1999)であるが、分析対象を「が」節の提題用法に絞り考察している。したがって、両者の「が」節の用法は、「前置き」に含まれる。しかし、文レベルの考察である。

2.5 「前置き」そのものを対象にした研究

次に「前置き」が主目的の研究を説明するが、大塚(1999)、山下(2000)、Yotsukura(2003)、金田一(1977)の順に説明する。

大塚(1999)は、前置き表現という言い方を用い「本題に入る前に現われ、コミュニケーションを円滑に進めるためのストラテジーとして使用される表現」(119頁)と定義し、ポライトネスの観点からテレビ討論における前置き表現の働きを考察している。

テレビ討論の参加者は、これらの前置き表現を用いて相手に気を配り(ポライトネス)ながら発話を行っていると報告している。また、これらの表現は、上記で説明した中右(1994)の発話様態のDモダリティになるとも述べている(119頁)。そうすると大塚の前置き表現は、上で説明した中右(1994)を「前置き」の観点から分析したものと捉えるこ

とができる。

山下 (2000) はアジアからの留学生に日本語で書いてもらった意見文を分析対象にし、前置き表現 (117頁) が見られると報告している。ただし、前置き表現の出現は、母語の影響なのか、日本語を学習した結果なのかについては何も述べていない。

山下 (2000 : 117頁) の前置き表現の定義は、

主に意見記述部の直前に位置し、意見提示が円滑に行われるために機能する表現を前置き表現と呼ぶ。前置き表現の範囲を広くとれば、書き手の主張内容と密接に関わりがある理由や根拠なども含まれる。しかし、ここでは、主張内容に直接関連がない前置きで、意見導入のために置かれる読者への対人的な敬意表現を扱うことになる。たとえば、様々な立場の読み手に遠慮や配慮を示したり、彼らが意見を受け入れやすくするための素地を作ったり、読み手の理解を助ける気遣いを表したりする表現をさす。

となっている。

山下は、対人関係をスムーズにさせる気配り、配慮をするために用いられる言語表現を前置き表現と考え、分析していると捉えることができる。

Yotsukura (2003) は、ビジネスの電話の会話を分析対象にし、「前置き」 (introductory statements) が話題を開始する (topic initiation) 手段として用いられる場合を考察している。

Yotsukuraの研究は、実際のビジネスの現場でどのような日本語の「前置き」が用いられているかを明瞭にするとともに、ビジネスの日本語の教育という観点から見ても大変重要な研究である。このような「前置き」を用いずにビジネスを日本語で行った場合には、必ず誤解や、摩擦が生じると容易に想像できる。

次に金田一 (1977) を説明する。金田一は、「前置き」に関しては他の研究と比べて一番広範で、体系的な考察を行っている。「前置き」を「本論の前の置かれる『そえもの』」 (153頁) と定義し、用いられる話題は、話の中心となる話題である主題と何の関係もない時候の挨拶、ちょっとした世間話などの副題となると述べている。

金田一 (154-158頁) は、「前置き」の効果は、〔一〕聞き手の気持をときほぐすことと〔二〕聞き手の理解の便をはかることの二つがあると述べている。〔一〕は《相手の感情を変化させ》、〔二〕は《相手に知識を与える》ことに重きがあると述べている。

〔一〕聞き手の気持をときほぐすためには、話し手と自分は共通の知識・関心、意見・感情をもっていると感じさせるのがよく、そのために、聞き手にとって既知のことがらが持ち出されるのが適当だと述べている。例えば、和歌山県出身の取引相手と商談する際に、「このあいだ田辺まで行きましたが、さすがにミカンの本場ですな。海岸ぞいの山のミカン畠、じつに見事だと思いました」といった「前置き」の例が挙げられている。

また、自己紹介は、話し手、聞き手の距離をうめるのに役立つので、「前置き」になると述べている。このように自己紹介まで「前置き」として考察することは、他の研究と大きく異なっている。

〔二〕聞き手の理解の便をはかるためには、聞き手の気持が解きほぐされる、話し手自身についての語りでなされる。その他に、主題(あるいは演題)の意味をわからせるように、かみくだいて説明したり、そういう問題について話すことの意味を納得させるような「前

置き」があってもよいと述べている。また、これから先の本論の構成や進めかたについて、アウトラインを紹介する方法や、「はじめに、この時間にお伝えする主な項目を申し上げます」といったラジオのニュースでの方法があると述べている。

金田一は、「前置き」を対人関係の観点から話し言葉の流れの中で考察しており、二つの点で大きな特徴がある。一つは、挨拶等の形式的、儀礼的で重要な情報を伝えない所謂交話的な (phatic) 「前置き」だけでなく、情報を持つ「前置き」も考察対象にしているという点である。

もう一つは、「前置き」の長さは、上記の和歌山県出身の取引相手と商談する際の「前置き」が示すように、文レベルだけでなく、文が数個集まったテキストも考察対象としているということである。

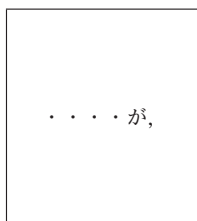
金田一の分類の「〔一〕聞き手の気持をときほぐす」は、形式的、儀礼的で重要な情報は伝達しない「前置き」に相当する。「〔二〕聞き手の理解の便をはかる」は、「主題（あるいは演題）の意味をわからせるように、かみくだいて説明する。あるいは、そういう問題について話すことの意味を納得させる」（158頁）という金田一の説明により、あらかじめ話の開始部で、主題について説明することを指すのであろう。主題は何なのか、なぜ重要なのか、なぜこの主題について話すのかと、主題そのものについて説明することを指すと捉えられる。

以上が「前置き」の先行研究についての考察であるが、どのように「前置き」を定義するかによって考察対象、方法が異なっている。

3. 分析

「前置き」はどのような形式を持ち、また日本語テキストのなかで占める位置、言語環境から認定できるかを次の3.1 - 3.5に分類し、図式で示す。分かりやすくするために、テキストを長方形の紙に横書きで記述したと考える。

3.1 接続助詞「が」の節で「前置き」が表現される場合



3.2 テキスト構造上要求される「前置き」（「手紙の構造」で時候の挨拶等による「前置き」）

前文（時候の挨拶等による「前置き」）
主文（本題・本論）
末文＋後付け（終了部）

3.3 著者自身による「前置き」の表示。例:前置きが長いゾ・・・

.....
前置きが長い ゾ.....
.....

3.4 「はい／いいえ」質問文での返答に見られる「前置き」。質問と、返答の中に見られる答え「はい／いいえ」とに挟まれた箇所が定義により「前置き」と認定される。

質問：・・・か 「前置き」
返答：はい/いいえ（答え）

3.5 話題1の発話の中に話題2による発話が挿入される。話題2の開始箇所から元の話題1への回帰箇所までが「前置き」となる。この場合には話題の変化と話題の変化位置により「前置き」と認定できる。

話題1
話題2 「前置き」 話題1への回帰

次に、上記の「前置き」の分類を、具体的に例を上げて考察、説明する。

3.1 接続助詞「が」の節で表現される「前置き」

接続助詞「が」の節によって、さまざまな働きを持つ「前置き」が表現される。これには定型と非定型の「前置き」がある。

3.1.1 決まった表現が存在する定型の「前置き」。直接本題に入るのを回避する働きを持つ「前置き」

(6) 申し訳ありませんが・・・

(7) お忙しい中すみませんが・・・

3.1.2 表現が固定していない非定型の「前置き」

(8) 大体、憲法というのは、政府権力が国民を縛るのではなくて、国民が政府権力を縛るものです。それが民主主義的な憲法の論理だと思いますが、その論理を国際関係に延長すると、いま後藤田さんがおっしゃったようなことになるわけです。

(『世界』2005.8：52頁 下線は小沼)

下線部の「が節」による「前置き」で話題が提出され、次の主節で「その論理」と受けている。話題を提出する働きを持つ「提題の前置き」である。

(9) 自分の納税通知番号が分からない人のために、健康保険証や運転免許証などの写しを同封すればいいというやり方にしているが、それすら『面倒くさい』という声があった」と残念そうだ。

(『世界』2005.8：151頁 下線は小沼)

下線部の「が節」による「前置き」で話題が提出され、それを次の主節の先頭で「それすら」と受けて叙述を続けている。話題を提出する働きを持つ「提題の前置き」である。

3.2 テキスト構造上要求される「前置き」

手紙の構造：前文（時候の挨拶等「前置き」）－主文（本題・本論）－末文＋後付け（終了部）

この構造から、時候の挨拶等の「前置き」が認定される。手紙の構造上要求される「前置き」では、時候、相手の安否への気遣い、日頃のお礼、お詫等が典型的な話題となっていて、話題選択の自由度は高いが、完全に自由に話題が選択できるわけではなく、上記の時候、相手の安否への気遣い、日頃のお礼、お詫等の中での選択という制約がある。

また、この「前置き」は、次に来る本題・本論と意味的なつながりを全く持たなくてもよく、「前置き」として意味的に完全に独立している。完全に独立しているならば手紙というテキストの中で孤立し、異質な部分となってしまうが、手紙というテキストの持つ全体構造、つまり、手紙は、時候の挨拶（「前置き」）－本題・本論－終了部からなるという枠組みの支えによって本題・本論等の他の部分と繋がるのである。別の見方からすると、「前置き」は次に本題・本論が来ることを示す標識となる。

(10) 拝啓 ようやく涼しくなり、鈴虫の鳴き声が聞こえるようになりましたが、いかがお過ごしでしょうか。

さて、旅行の件ですが・・・

(下線は小沼)

下線部からこの手紙の本題に入ることが述べられる。したがってその前の箇所は「前置き」になり、時候の挨拶「ようやく涼しくなり、鈴虫の鳴き声が聞こえるようになりましたが、いかがお過ごしでしょうか。」は、手紙の構造上必要な挨拶（「前置き」）である。手紙は、時候の挨拶等の「前置き」－本題・本論－終了部という構造をしており、時候の挨拶等の

内容は手紙の本題とは全く関係のない内容でも問題がない。むしろ、無関係な内容の場合の方が普通であろう。この場合には、手紙の構造上ははっきりと時候の挨拶等の箇所が「前置き」だと認定できる。すぐに主目的の話題に入るのを避け、接触で生じる緊張を和らげるために「前置き」が緩衝材として働いている。ここの「前置き」は働きは「儀礼の前置き」となる。

次も手紙の書き出しからの例である。ここでの「前置き」は、時候の挨拶等による、働きから見ると「儀礼の前置き」と認定できるものであり、手紙のテキスト構造上要求される「前置き」である。

- (11) 謹啓 毎日暑い日が続いておりますが、先生にはお変わりなくお過ごしのことと存じます。小生もお陰様で元気でやっております。

さて、本日このようなお手紙を突然差し上げるのはほかでもございません。

(以下略)

(『例解新国語辞典』：付録22-23頁 下線は小沼)

(11) は、手紙の書き出しからの例である。この次に本題・本論が続く。頭語の「謹啓」を除いた「毎日暑い日が続いておりますが、先生にはお変わりなくお過ごしのことと存じます。小生もお陰様で元気でやっております。」が手紙の構造では前文と呼ばれ、本稿の立場では「前置き」となる。すぐに主目的の話題に入らないことで接触の際に生じる緊張が和らげられ、「前置き」が緩衝材として働いている。ここの「前置き」は働きから見ると「儀礼の前置き」となる。

この手紙の「前置き」は、手紙というテキストの全体構造（時候の挨拶等（「前置き」）一本題・本論一終了部）において必要な部分として存在する。全体構造にとり必要な部分なので、「前置き」のさまざまな雛型が存在するのである。

3.3 著者自身によって表示される「前置き」

- (12) [遊々旅情] ドイツ冬の旅 アウトバーンをベンツで疾走

◇「クルマの町」から「黒い森」へ

「シュツットガルト」というドイツの町の名前を聞いて「ベンツの町」「ポルシェ博士が活躍した町」と連想できる人は相当なクルマ通である。金曜日夕刊の「クルマ世界」欄を担当しているからというわけではないが、今回の旅はバーデン・ビュルテンベルク州の州都・シュツットガルトから始まった。

まあ、せっかくシュツットガルトに来たのだから、クルマそもそも物語のおさらいをしておこう。

内燃機関を載せた「馬なし馬車」（つまり自動車）がこの世に登場したのは1885年。この年、ゴッドリブ・ダイムラーはガソリンエンジンを2輪車に搭載した。同じ年、この事実を知らないカール・フリードリヒ・ベンツは1気筒4サイクルエンジンを3輪車に載せた。この2人は後にダイムラー・ベンツ社を設立し、名車を数々、世界に送り出した。この間、一人の天才が出現した。フェルディナンド・ポルシェである。ダイムラー・ベンツ社も、世界のレースで敵なしのスポーツカーを製作したポルシェ社もシュツットガルトに本拠を置いた。(中略)

思わず前置きが長くなった。さあ、ベンツに乗ってアウトバーンを南下する旅を

始めよう。目指すは冬のシュバルツバルト（黒い森）である。

まずアウトバーン5号線を南下してオッヘンブルクに近い「ゲングエンバッハ」という町を目指した。よほど詳しい地図でないと載っていないほど小さな小さな町である。人口は1万人。西へ30キロも行けばフランスのストラスブール。ワインの産地である。もちろんここゲングエンバッハでも良質のワインを産する。（中略）

誕生して114年のガソリン自動車で帰るのが少しばかり気が引ける思いがした。

（『毎日新聞』1999.1.14 夕刊 下線は小沼）

下線部の前の箇所すべてが「前置き」である。下線部は「思わず前置きが長くなった。」とあり、著者自身がこの下線部の前の箇所は「前置き」だと考えていることが分かる。

第一段落は、一見するとこの記事の表題に対応した内容であり、記事全体の開始の段落と受け取れる。しかし、この記事の表題中の「ドイツ冬の旅」という語句からずれたテーマで書かれた内容を持っている。第2段落は完全に表題から逸れる開始部を持ち、「まあ、せっかくシュツットガルトに来たのだから、クルマそもそも物語のおさらいをしておこう。」という言い方で表現される「前置き」を用いて脇道に逸れることを宣言し、長い脇道への逸脱が始まる。その後著者自身が話の筋を自己修正し、下線部部の後「さあ、ベンツに乗ってアウトバーンを南下する旅を始め」という本来の話題に入っていく。本題で触れる話題に関連する語句を説明し「前置き」を作っている。

ここの「前置き」は出発地点の町「シュツットガルト」から始まり、つぎにこの町と深い関係のある「ベンツ」へと話題が移る。そのあと本題の南ドイツへのドライブへと話題が移っている。

(13) 昔、『まんがはじめて物語』というアニメ番組がありました。それを見ていた沙魚は、素直な子供だったから、何かを最初にやったひとはマンガにしてもらえるほど偉いんだなあ、と思ったものです。

その対極にあってさげすまれるのが、真似っこです。でも長じるに従い、自分の腕を上げるには、うまい人を真似るにつきる、ということも学びました。でも、一本立ちしたら、もう、人の真似をした形跡を作品に感じさせたら評価を落とします。

クルマにもそういうことがいえます。これは売れると気づいて、あとからよそのメーカーが同じような寸法で同じコンセプトのものをを出してきたら、「これはオマージュです」と言っても通用しません。しかし、実際に対抗馬をぶつけ、後出しの有利さを生かしてズルいぞ、といわれながらも勝ったもん勝ちなのです。勝てば……。

で、前置きが長くなりましたが、今回はタントです。沙魚は、初期のタントの試乗した時、ちょうどスポーツカー派だったので、異常に高い天井に落ちつきを失ったものです。ミニカに乗っていた昔、初代ミカトッポのシートに座った時は感動しました。自分がその時軽モードだったからでしょう。

ですが、プレサージュとiに乗っている最近、タントに座ってみて、素直に感動しました。なんて居心地がいいんだろう、と。（後略）

（『ベストカー』2006 12/10：104頁 下線は小沼）

下線部で著者が自ら、「前置きが長くなりましたが」という言い方を用いている。この表現により、その前の箇所すべてが「前置き」だと著者が考えていると分かる。この表現の

後、話題は本題の「タント」というクルマに移っていく。

しかし、下線部の前の「前置き」の箇所すべてをよく見ると、はじめは「まんがはじめて物語」が話題となっていて、次の箇所では、それを受けてクルマへと話題が移っている。その証拠として、「クルマにもそういうことがいえます」の中に、「そういうこと」が含まれ、「まんがはじめて物語」を話題にした内容がクルマにも当てはまると述べていることが分かる。

ここでは、「前置き」が、二つに分かれている。初めの「前置き」は、本題とは無関係で、次の「前置き」は、本題と関係がある。「まんがはじめて物語」による「前置き」は次の車の話題による「前置き」となっていて、この二つの「前置き」はさらにこの文章全体の「前置き」になっている。この例では二層の「前置き」が見られる。

3.4 「はい／いいえ」質問文での返答に見られる「前置き」

質問と、返答の中に見られる答え「はい／いいえ」とに挟まれた箇所が定義により「前置き」と認定される。答えが質問の直後に来ず、質問と返答中の答えとの間に「前置き」が出現する例である。

(14) 質問 動物にもホクロはあるの？

返答 ホクロって、細胞の中の色素が何かの拍子にポッと出てきたものなんだ。

メラニン色素っていうんだけど、これは人間も動物も持ってるんです。だから、動物にも同じようにホクロができるんだよ。動物は毛に被われているから、あまり見つけられないけれど、毛をかき分けたりするとみつけられるよ。

(『ベストカー』 9/10: 93頁 下線は小沼)

質問は「動物にもホクロはあるの？」は応答詞「はい／いいえ」で返答できる質問である。しかし、返答部の最初にはその「はい／いいえ」が出現せず、出現するのは答えである下線部である。では、質問と下線部の答えとの間にあるものは何なのであろうか。内容は、質問中の語句「ホクロ」を説明しているものである。それを踏まえて「だから、動物にも同じようにホクロができるんだよ。」と答えに繋がっていく。つまり、質問と答えとの間の箇所は、「ホクロ」について説明していて、この質問 - 返答を読む者にあらかじめ答えがたやすく受け入れられるように情報を与えている「前置き」である。働きから言えば、「情報付与の前置き」(小沼2021)である。しかし、語順を変えると「前置き」の箇所は、「前置き」ではなくなる。「だから、動物にも同じようにホクロができるんだよ。」を少し変え、返答の先頭に移動すると、

(14-1) 質問 動物にもホクロはあるの？

返答 動物にも同じようにホクロができるんだよ。ホクロって、細胞の中の色素が何かの拍子にポッと出てきたものなんだ。メラニン色素っていうんだけど、これは人間も動物も持ってるんです。動物は毛に被われているから、あまり見つけられないけれど、毛をかき分けたりするとみつけられるよ。

となり、「前置き」の箇所は、「前置き」ではなくなる。結論のあと重要な語を詳しく説明している箇所と捉えられる。ここでの「前置き」は、常に「前置き」の働きを持っているのではなく、位置によって「前置き」としての働きを持っていると捉えられる。

(15) 質問 これからも明治の岡山に生きた女性を描いていくんですか。

返答 東京で一番強く感じるのは生活の気楽さ。岡山では、今も、生活すべてが周囲の人に把握され、あれこれ言われる息苦しさがある。最近、地元の商工会や新聞のシンポジウムなどに呼ばれるんですが、そういうのは断れない。「東京でええ気になってるんじゃないけ」と言われたり、親が地元で冷たくされたとか、私、本気で恐れてんですよ。だから、地元では、選挙に出る人のように「みなさんのおかげです」。平成の時代でさえこれほど息苦しい。明治の女はどんなに息苦しかったかというのを、東京にきて、より強く想像できるようにしました。これからも明治・岡山・貧乏で、閉じこめられた、狭い世界を書いていきたい。

(『月刊 現代』2000.10 : 111頁 下線は小沼)

質問は、「はい／いいえ」で返答できるが、答えは返答の初めには来ず、一番最後の下線部に来ている。ここでは答えは応答詞で出現せず、内容から「はい」だと分かる答えになっている。質問文と下線部の答えの間に、働きから見ると長い説明が入っている。「前置き」の定義から見ると長い「前置き」が入っている。ここでの「前置き」は、結論を引き出した理由を詳しく説明しており、「情報付与の前置き」となっている。

この例でも語順を変え、質問に対する直接の答え「これからも明治・岡山・貧乏で、閉じこめられた、狭い世界を書いていきたい。」を返答の初めに移動すれば、「前置き」は、「前置き」ではなくなる。

(15-1) 質問 これからも明治の岡山に生きた女性を描いていくんですか。

返答 これからも明治・岡山・貧乏で、閉じこめられた、狭い世界を書いていきたい。東京で一番強く感じるのは生活の気楽さ。岡山では、今も、生活すべてが周囲の人に把握され、あれこれ言われる息苦しさがある。最近、地元の商工会や新聞のシンポジウムなどに呼ばれるんですが、そういうのは断れない。「東京でええ気になってるんじゃないけ」と言われたり、親が地元で冷たくされたとか、私、本気で恐れてんですよ。だから、地元では、選挙に出る人のように「みなさんのおかげです」。平成の時代でさえこれほど息苦しい。明治の女はどんなに息苦しかったかというのを、東京にきて、より強く想像できるようにしました。

3.5 話題1の発話の中に話題2による発話が挿入される「前置き」

話題2の開始箇所から元の話題1への回帰箇所までが「前置き」となる。この場合には話題の変化と話題の変化位置により「前置き」だと認定できる。

次の例は二人の会話である

(16) 吉村①焼酎もうまくなりましたよね。

城山②ほんとうにうまくなった。

③宮崎に「百年の孤独」なんて焼酎あるでしょう。

吉村④大河内昭爾君っているでしょう。

- ⑤彼がうちのすぐそばに住んでいます。
- ⑥宮崎県生まれで、酒が一滴も飲めない。
- ⑦それなのに、宮崎の人が焼酎をどんどん送ってくるんだ。
- ⑧あの人に送ってもなんの意味もない（笑）。
- ⑨たちまち僕のところに持ち込まれるわけ。
- ⑩だから「百年の孤独」もよく飲みます。

（『対談集「気骨」について』：210-211頁 文番号，下線は小沼）

③で下線部「『百年の孤独』なんて焼酎あるでしょう」と相手の反応を要求している発話がある。しかし、④ではその要求を無視し全く異なる話題を提出し、⑨まで話を進める。③と④は結束性という観点から見ると繋がっていない。しかし、⑩に③で見られた「百年の孤独」が出現し、③と呼応していると分かる。④から⑨は、③と異なる話題で話が進行しており、③と⑩に挟まれ、⑩に至るための「前置き」になっている。ここでは、話題と、話題の変化位置を追うことで、「前置き」が認定できる。

③に対して、次のように反応することもできる。

(16-1) 城山③宮崎に「百年の孤独」なんて焼酎あるでしょう。

吉村④-1 ええ、ありますね。「百年の孤独」というと、

- ④大河内昭爾君っているでしょう。
- ⑤彼がうちのすぐそばに住んでいます。
- ⑥宮崎県生まれで、酒が一滴も飲めない。
- ⑦それなのに、宮崎の人が焼酎をどんどん送ってくるんだ。
- ⑧あの人に送ってもなんの意味もない（笑）。
- ⑨たちまち僕のところに持ち込まれるわけ。
- ⑩だから「百年の孤独」もよく飲みます。

こうすれば、城山の発話③と吉村の発話④-1がつながる。

次の例を見よう。

(17) 井上①なるほど。

- ②詠美さんの文章にも太宰治ばりのリズムがありますね。
- ③東京オリンピックは小学校に入る前ですか。

山田④赤ん坊でした。

- ⑤小学校のときは三島由紀夫が死んで担任の先生がショックだったみたい（笑）。
- ⑥私は有島武郎の『一房の葡萄』の世界じゃない？とか思ったりして。
- ⑦そのころは武者小路実篤とか大好きで、ああいうヒューマニズムあふれたものが好きだったの。

井上⑧NHKラジオ第二放送の学校放送で「ラジオ図書館」なんていうのをお聞きになったことはありませんか。

- ⑨そのころぼくが台本を書いていたんですよ。
- ⑩『一房の葡萄』、坪田譲治の『善太と三平』、小川未明『赤い蠟燭と人魚』夏目漱石の『坊ちゃん』……。

山田⑪あ、ほんとに？

⑫私は給食が恐怖で、食べるのに必死だったから、よく覚えてないんです。

井上⑬じつをいうとあまり人気がなかったんです(笑)。

(『山田詠美対談集 内面のノンフィクション』：95-96頁 文番号，下線は小沼テキストの結束性という観点からこの二人の発話を考察すると，井上の質問③に山田はすぐに発話開始部④で受け「赤ん坊でした」と答えている。「いいえ，小学校に入る前ではなく，赤ん坊でした。」と考えれば，井上の発話を受けていることがはっきりする。したがって，この箇所は，言語では表現されていないが，意味的に先行する相手の発話を受け，関連を持つ例になり，井上の③と山田の④は繋がっていると分かる。

しかし山田の⑦と井上の⑧は繋がっていない。⑧で話題が変わるが，⑩で下線部の『一房の葡萄』が出現し，山田の発話⑥中の下線部の『一房の葡萄』と重なり，話題が繋がり，発話の結束性が戻る。井上の発話⑧⑨は⑩を述べるための「前置き」となっていると捉えられる。この「前置き」は，話題の変化箇所認定できる「前置き」である。

以上「前置き」だと認定できる言語環境を3.1 - 3.5に分け，例を用いて説明した。

4. まとめ

本稿は「前置き」そのものを働きの観点から考察，分類するものではなく，何を手掛かりにすればテキスト中で「前置き」だと認定できるか，どのような言語環境に「前置き」が出現しているのかを様々な例を分析することで考察した。

定義にもよるが，「前置き」を広くとらえ，接続助詞「が」を用いた節（本稿の3.1の分析）による「前置き」だけでなく，テキスト構造上要求される「前置き」（「手紙の構造」での「時候の挨拶等（前置き）」（本稿の3.2の分析），著者自身による「前置き」の表示（本稿の3.3の分析），「はい／いいえ」質問文での返答に見られる「前置き」（本稿の3.4の分析），話題1の発話の中に話題2での発話が挿入され，話題2の開始箇所から元の話題1への帰属箇所までの「前置き」（本稿の3.5の分析）を考察した。このように「前置き」を広く捉えることで，「すみませんが」などのいわゆる定型の「前置き」だけでなく日本語のテキスト全体に見られる様々な「前置き」の全体像が見えてくる。

参考文献

- 大塚容子 (1999) 「テレビ討論における前置き表現－「ボライトネス」の観点から」
 (『岐阜聖徳学園大学紀要<教育学部 外国語学部>』第37集) 117-131頁
 小沼喜好 (2003) 「日本語の『確認質問の単純質問』での返答について」(『Association of Teachers of Japanese Occasional Papers』No.5) 17-18頁
 小沼喜好 (2004) 「日本語の返答の仕方について」(『外国語教育論集』第26号，筑波大学外国語センター) 175-183頁 [採録] (2007) (『日本語学論説資料』第42号 第5分冊(コミュニケーション) 論説資料保存会) 270-274頁
 小沼喜好 (2005) 「日本語での話の進め方について」(『外国語教育論集』第27号，筑波大学外国語センター) 141-150頁 [採録] (2007) (『日本語学論説資料』第42号 第5分冊(コミュニケーション) 論説資料保存会) 275-280頁
 小沼喜好 (2006) 「『が節』とその前置き用法について」(『外国語教育論集』第28号，筑波大学外国語センター) 53-63頁 [採録] (2008) (『日本語学論説資料』第43号 第2分冊増刊(文法) 論説資料保存会) 83-88頁

- 小沼喜好 (2007) 「日本語の前置きの働きと分類について」 (『外国語教育論集』第29号, 筑波大学外国語センター) 127-137頁 [採録] (2009) (『日本語学論説資料』第44号 第4分冊 (文章・文体・音声・音韻・方言) 論説資料保存会) 72-77頁
- 小沼喜好 (2008) 「何を『前置き』とするのか」 (『外国語教育論集』第30号 筑波大学外国語センター) 87-98頁 [採録] (2010) (『日本語学論説資料』第45号 第2分冊 (文法) 論説資料保存会) 318-323頁
- 小沼喜好 (2010) 「講義にみられる前置きについて」 (『外国語教育論集』第32号 筑波大学外国語センター) 35-49頁 [採録] (2012) (『日本語学論説資料』第47号 第5分冊 (コミュニケーション・言語学・対照研究) 論説資料保存会) 260-267頁
- 小沼喜好 (2011) 「前置きの階層性について」 (『流通経済大学流通情報学部紀要』Vol.15.No.2. (通巻29)) 27-40頁
- 小沼喜好 (2021) 「『情報付与の前置き』について」 (『茨城キリスト教大学紀要』第54号 人文科学) 67-81頁
- 柏崎秀子 (1993) 「話しかけ行動の談話分析ー依頼・要求表現の実際を中心にー」 (『日本語教育』79号 日本語教育学会) 53-63頁
- 亀田千里 (1998) 「接続助詞『が』の提題用法について」 (『日本語と日本文学』26号 筑波大学国語国文学会) 1-9頁
- 金田一春彦 (1956) 『話し言葉の技術』 (光風出版) (復刊(1977)講談社学術文庫123 講談社)
- 小出慶一 (1984) 「接続助詞ガの機能について」 (『紀要』7 アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター) 30-44頁
- 西條美紀 (1999) 『談話におけるメタ言語の役割』 (風間書房)
- 佐久間まゆみ・杉戸清樹・半沢幹一 (編) (1997) 『文章・談話のしくみ』 (おうふう)
- ザトラウスキー・ボリー (1993) 『日本語の談話の構造ー勧誘のストラテジーの考察ー』 (くろしお出版)
- 杉戸清樹 (1983) 「待遇表現としての言語行動ー『注釈』という視点ー」 (『日本語学』第2巻7号 明治書院) 32-42頁
- 高橋美奈子 (1999) 「『判断詞+接続助詞『が』』による主題提示を持つ文について」 (『日本学報』18 大阪大学文学部日本学研究室) 31-44頁
- 中右実 (1994) 『認知意味論の原理』 (大修館書店)
- 三井久美子 (1997) 「『依頼』のフレームの明示性について」 (『日本語・日本文化研究』第七号 大阪外国語大学日本語講座) 235-245頁
- 山下みゆき (2000) 「日本語学習者の意見文における前置き表現の使用の実際」 (『日本語とアジア諸言語との作文対訳コーパス: 対照言語学/日本語教育への応用』, 国立国語研究所) 117-121頁
- 『例解新国語辞典』第三版 (1992) (三省堂)
- Hymes, Dell (1972) Models of the interaction of language and social life. In: J. J. Gumperz/D. Hymes (ed.) Directions in sociolinguistics. New York. pp. 35-71.
- Yotsukura, Lindsay Amthor (2003) Topic initiation in Japanese business telephone conversation. In: McClure William (ed.) Japanese/Korean linguistics vol.12. CSLI, Stanford California. pp. 75-87.

用例出典

- 『月刊 現代』2000.10 (講談社)
- 『世界』2005.8 (岩波書店)
- 『対談集「気骨」について』2006 (新潮社)
- 『ベストカー』2006 9/10 & 12/10 (三推社/講談社)
- 『毎日新聞』1999. 1.14 & 1.22
- 『山田詠美対談集 内面のノンフィクション』2001 (文藝春秋社)
- 『例解新国語辞典』第三版 1992 (三省堂)

Identification of *maeoki* ‘prefaces’ in Japanese texts

Onuma, Kiyoshi

Abstract

In this paper I explain and analyze in detail how *maeoki* ‘prefaces’ (hereafter *maeoki*) can be identified in Japanese texts. Functionally there are many kinds of *maeoki*, including *maeoki* for politeness, *maeoki* that propose themes, *maeoki* that soften tension at a first meeting, and *maeoki* that give information to ensure mutual understanding.

Maeoki can also be analyzed formally. Focusing on where *maeoki* are used in the overall text structure, I demonstrate that *maeoki* can be identified in the following five positions in a variety of text genres.

- i) *Maeoki* can be expressed in a clause ending with the particle *ga* ‘but’, for example, *Mooshiwake arimasen ga*, ‘There is no excuse, but’ or *Sumimasen ga*, ‘I’m sorry, but’.
- ii) A Japanese letter, roughly speaking, consists of four parts, a season greeting, the body of the letter, a conclusion, and an ending. The initial season greeting functions as a *maeoki*.
- iii) In expository texts, the author may use a self-directed expression like *Maeoki ga nagai zo* ‘(Your=the author) *maeoki* is (too) long, I tell you’. These expressions suggest that the preceding text is a *maeoki*. Because the author references the *maeoki* explicitly, the *maeoki* can be identified easily.
- iv) In a response to a yes-no question, the text between the question and the actual answer is regarded as a *maeoki*.
- v) In texts where after the first theme, a second new (seemingly unrelated) theme is introduced which is later connected to the first (old) theme, the utterances related to the second theme can be regarded as a *maeoki*.

This study contributes to research on *maeoki* that previously focused on clauses ending in *ga* ‘but’. By taking a broader discourse perspective that includes an analysis of the overall text structure, I demonstrate that *maeoki* can consist of a multiple of sentences, and their identification and position may vary across text genre.